新撰六帖題和歌 第五帖

和書門 類
四二四二一 號
一八〇 函
九 架
五 冊

内閣文庫
和書 類
四二四二一 號
五 冊
二〇一 函
二二 架

内閣文庫
番號 和 42421
冊數 5 (4)
函號 201 767

国立公文書館
National Archives of Japan

新撰六帖題和歌第五帖

しらぬ人　いひそむ　としへていふ

のちのあした　よひ　あひおもふ

ことひとをおもふ　まさておもふ　いはでおもふ　人しれぬ

人にしらるる　夜ひとりおり　ひとりね　ふたりおり

子をわかる　あかつきおくる　一よへだつる　二夜へだつる

ものへだてたる　ひころへだてたる　としへだてたる　こぞへだてたる

うちきてかへる　よひのま　とのゐ　ちかくてあはぬ

人をまつ　ゆふとを　人をよぶ　みちのたより

ふみたがへ　人伝て　日をへだつ　わすれず

こころかはる　たのむる　おもひいづ　むかしをおもふ

浅草文庫
日本政府図書

むかしゐん人 あつらふ ちぎれば 人をたづぬ
めづらし たのもしき ちぎらふ くちをしむ
人づま 家をしたふ たちをひやを おもひまどふ
くれどわびしき 人をうらむ とくゆかれ なきわびしむ
たしなみを なかなか わがこも わの世に
かくれ一ま 二たびおもひ とハうひとし こん世
うらみ むかしを なまるる かわん
ちとゆひ くし ふるまう 玉乃を
なまめかしき うらみ 後くる よまくら
こゝろ入 こゝろも あかやさき衣 なか川衣
あさごろも 衣かハ うつ衣 古き衣

あさごろも うつ衣 ぬれ衣 さうれん衣
ふるき袴 紫 ひも たび
ひとり おとれて ふゑん こと
ふえ ゆみ や たち
くるか きや そらわ あふさき
かさ えの くらん はと
いろ くれなゐ むらさき くちなし
えんらは おしき あや いと
まつさ 紋の

しらぬ人　前内大臣

妹ますふ山乃けられ丸木橋しらなくや迷ふ人さ

某大納言

春にのこさくまゝつこし此かとれもまて　しらぬ世の人をしらて

入道三位

我すらわかの心をもしらぬあれ非といひくらし　はしめきん

前左京大夫

和そしれ人ともいらぬ兩親たかめくまひ宜からりくり

入道左大弁

ちそやぬの神のみむろうまてしてつやくらしぬ人よしほく

いむそらしむ

なりひらのなかちかやる山の月のかくれく後のちどりうきなる
ここの人ハ世をわすれ玉ひて世をはなれてきのみなさき心なかにはは
なかまりかわかぬを成もいひすてそれよりつきのふ(ね)すそにはなれ
旦へねそて世初の筆のなかちの筆すへあめの衣のおもそうき
とをなりてかつとうかかするへハ文をかきてことちせん
年をへていふ
山川のかけたこほりを年すへて心なかくもこひ(いひ)わたるかな
見し人あたなし玉の緒の世のはかなさはしらすかもん
あまたのとしすきこひをむかしおもひそめけていひなせ
おもふ事いかやいかに年をへてくいひくの数ハはかもれなき
年月ハいつのいふかきの(ゆ)くよわるさしもこひのゆめとなりせ
ちしめてあふ
こ(ゝ)ろ(?)はしむ野さえの小田のなをおもひとけてこそ袖へぬれ
あひよるてぬるゆめのつねなくちる筆にやそみくゆめのはな
かはるとおもふ心ハたつや逢坂の山下水せきとめそあり
ちきりあり新手枕の袖くちれはなれそめの妹かくるを
我庭のなきおもひと今なふかなへきさ夢えしもいくて袖に(ぬ)れ
のちのあした
めの床のうちのしき波かるかわかしふかくうけそひつ
おもぬ夢を月そくといふ(?)ことに(?)なそむすえ別のは
わかれかや宿のつまえよまおてゆく後かりしまれといひつ
まなりうき後を枕乃袖うけておもぬわかもゆるよおそやとこふ

たゝにむかひてさへなをそれかうとて見さへ恋となれはつ

志免

里人乃新墾のみしめなはかけて祈しるしあらせ

ひとよりやかしめゆひしつのまへの新田花を人よかさきそ

あらそれてもやしめさしむすまを標なけりと人もさるゝれ

人しれぬ心ハ恋まかけまけと植ほれなきやしめもかなん

三輪山乃杉のふるまの見しあなハりをさや人をつれなきれとハ

あひおもふ

諸ともにしのおもひハ人も見るまゝたえぬもとりすくる

つきしたくひとりくるしいひそむ見れむまきれハ

鵲夕りまかさる袖ハのとりなれてともにうきのあられやなる

あつさらまれてこそまとてよせ竹のうたかれてくも数うかなくふ

いりくせんしなはともすことしみおれなすかきり恋命なけしもそ

あひおもをね

ちる月乃まちのあかり乃まれのまやたれなす紀つきを植たてさ

秋うつきつくりん人よおさうちてあ浅く人たすふんむよはさき

松ちたきの川よしみてにやいかせやまよつきうみの淵なきうりん

むなしさのたえ行すりよみ道ほうらぬおきせに文ちうひめる

にせんのゝ人よ山をうのせてあさくとも又道をへ植うる記うれ

むこと人をおもふ

たゝろ波乃うきそても人よ契りさやうしうにのこみうあらほとハ

たのむまてつきやうら御秋まてさえ恋ハいそかきりたてつ

海士小舟かゝる浪のよる人もなかりし名をは袖乃ぬるゝらむ

〽忘れ雲あるしゝの夕陰に我身をうしと恨そふるぬる（作）（らイ）
それなる心にうめる夜あくるゆくまゝことつまにかうらん
つまさそれとふ

河辺ふる立田の山の名のみよりそての人をおもひ初て
忘しさもみまくかりしも君たちてまつはんよおもしやはする
この夢よりく心もなくかなれなく弱さ今は道いそくなり
なかなるみめるかふ中にかくもいつか行のまゝ袖とまるらん
れとこひ袖さへ（うたイ）さちふるれなく方あけとうらむえ
いまそおもふ

風吹は浪のうきよも志潮さしつらはいとゞ思ひかくるけふぬるらむ

なかきよる夢ひとつかくぬ年月をいそくらふとはかなくて今
まそめうすよんまこふてなきくらん身をうつしきりのなみだつ
忘ふるてうつをそもらにかく思ひはなくてふ此くちや恨
くやうかはそぬをふそでもなくとうはるてつる涙も、それ
人忘れぬ

こひもひぬかなしいはかの浮もふるこの世をかくる人めかりて

〽うれぬのあし此下袖のよそくもに立つて物かとなくる人もは

〽いそくれかまの忘れひの下とくなふくらむもかれのなく（あけ）

〽たちも志るは流ぬるまつうきのそて袖へい着をうちひあはさん
人めかはそくれつく夕立の空をくかしきをかくそうる
人よ志らで

去日野も若菜の春くれは常にかへしも限らぬわれ
忘れ難の涙を留めたくひとつ誠といふことは世に有りよかは
むつまじき河竹の月のおもかげされはよつのにくれなゐのや
下らぬ夜のふりや雲と浮ぬる玉床もおさに人のきみふまえ
我なりしくれはわすれず立もとは日の暮しめよわか心はさりけそ

独ひとりねのおり

東てもうらひとりおきの床夜の花の色も香も涙の入りて
ひとりかた寝しきすまにみる月はさひしさそ独ん宿もは
いつそのお袖はぬれ追分ん白浪乃雲田の山の雲井のるもあふ
行りまさてはきしおの浦の此蘆中にひさをつけさて我を恋しつ
おりた夜よ独おきのそおこすへとさとられぬ身は立せちる

ひとりね

独つてひとりや独寝ん衣手のよに包ありうきを知れは世を
まそてとふまよ身のうれぬんのよひくをこひへは独寝つるのろ
独や心のうちは身を思と寸風をみん人のなさそのよすまくね
侍像てさえくんの夕まとひめのとはすくて独りぬかやんを
とり火のきえて心ころうり世は我けをたよみの衆

ぬきうりね

読るもに新をなす婦の十寸鏡みえてたにわれぬ心なりけり
侍えてもたりひよちさか蔵とにける独ぬ宿中の文よ夕か
たらそ盃今ならぬ身の我は人のてあ衆の形ん心かり
わきてこのちきてかけりかうとろんきかれ夕の命とも命かり

あひにける河さへ袖をうきくとて詠やへもいかす明ぬは来き
ぬをしる

山風も河音まさりひえとられと妹さしめれハも来もは
くろうと吹みされかくうかの花ハすさ夜よかよ風なきもは
卅くまいやハ詠うかてあひうろもこれハ夏うとおもしろれて
あるうらにさみよ袖をかさしてあぬ東ハすきさまぬは
をのつうく花をうし詠みまれ我おもうと妹ころきたり

あゝさハろ

暁乃ゆかつきを音もつうろれ明もてハ人よりわれせきまや
音嘆けをあぬ別のつうさかすりくされれまき分と鳴く
たくひもくうき暁の別をは何よ似すりといひてや連

あつさにおきてはされハ人もうすあるは涼まりや妹ハいよなわ
朗詠ハまさ東ふりしとやまさ人へさや人やり見音ハなおく

一束乃こつ

笹竹乃一よみふしの色をそたなよすとあるうちに急かん
おふとみあしのうか詠よ二束とハみてもうんともつくきり
ろふそしろあしぬこゝろよふし初て氷をあさころく
いま世山井よせくる玉菜は一よめつさてさとろ春きを
山の川のうきねよかうふ見れ行のよすま世よすやてあひ見初

二束乃こつ

別のやとみうきをもあつさそ玉くしきを二束あつそと恨つ
あかぬまへさのふるふやそおもうか川おもてみ夕をまち渡り

月ならでともなけしきを二つ月は出てなまめくらん
こよひふくひろふかいこゝろぶる川のその瀬は水ともまためぐめ
たやさまよせるかね日数をかぞへても逢ふ夜ハえんをことのとふよそ
ゆめのうてそでたり
思ひしらぬおつまをとめるもときさけはにあふお尋てゆく別める
秋の夜の雲くもれる空の月みぬハゆりしれ君のあふせ
七夕さへ年にたゞ一とせ逢ふをちぎりとはさてなる
我なさぬなかのひとつりが昔ハ秋ふくるの風そつまふ
あらきこゝろハ嫉よひさ拙はうきよたのもきるひとやある
相方の色こそ前後
涼風よ雨の露をみわすて数あるゆゑ身中ハ秋ん上ひとつすまき

夏日月の日より出てあひをし更新の色ゆくまでよたりにきるか
りわるとてあまりし浦にかれ日ハそなふきまつうりかれ
かぞへとも川日数ハ今を二月よそくおかる身もたれかれぬ経まハ
逢事をまちかねてくといひのくくやこよひ月もまかれきする
こし色てそたり
楽しと世をはつなかのかなしきふみのよふくさるなりなほすさ
そのまゝはなれてもきん楽と世をわれハ何かよと思ひきらん
おひみんとおもひし年のこいたるくハ待れし指よいまや老ぬらん
まちこゝろみてもはなしてもはゞのきさく悲しやハすき
あひみそめてよりつもる年月の数もえぬ人ぞ立つき
ことばみちる色たくなる

秋せこゝろなしの夜をなかくと里をさして出かつころかね
海山かけて里乃おもなかりし身をさそてぬ心ひとつは
思ひやる心もくるしわきてその名もしらん里かこひこかれて
行つきは二海へたつる見ぬ妹か門一しつらく思ひやむものハなん
夜見ぬを見のこそもとよみあ山中よみかくひとり妹恋しや
うちとさそてあくろ
妹風も露をまたなれハかつ夜うちさそて妹よおもひそ
やさしく吹けやもとしひとり夜きてあひたき東路の秋風
なれくし人のなからひもかりそとこなりくつの待枕
かりまてもちきりあれなやうく夜さてまちかねおもふ
くへしとハおもひもよりて袖にうち露に宿るや人乃袖をぬらさめ

よひのま

かきくもれ霜のまかふらしぬ袖に夜をそふる身の枕数かな
みとなたのぬ袖の下ひあけはあれやみハうつゝもさらにあうて泣く
人をれぬまていさ海の底も外もうちも袖のぬ露の中にある
おもつきの別まてうかへしつめまりこす文の露か夜をそゑるなき
霜かまたにわかれまされ乃涙もなみたやさらて人もこはれ

捨くり

手をすくさひし袖の心をいつかわすれは近き乃露もあし
いつまてひくき乃色をうつしかにまたなくあり
あれたけはようさふくそのそのまれ人のつきにいひつくう
恋かわしひつゝきもむろとなすきみやういて涙を恋時

あまくだりしそのいにしへ乃ふることをきくやうかけて神代のころすく
ちくておりとそ
おりかさねまちくさ井に色そへてにほひこそれんの袖にみ花
よろたち紗人のたれはら衣きて我袖やたゞにくちらん
されぬまうけ紗まつかくつ見るうらひふしても何まちいさん
露の河母もよみをそへもうひろなきかしとかきくぬれ森の本の八
いまひもはしもためまいみしうらとけて人のめま出まれきき
人をまち川
まつかとはさ村の命をいまれかやさそぬ袖のかたのか重ぬらん
山乃はに出る月をおもひまちてうすきさりともと君を待ぶ
月数いまされぬこゝろもある袖を人をうしめれはひくらさ

くる夜はまつ事となけれともたのまぬ枕をなを志ら川なりき
いまそせんさへいいひかへしことをまち侘なれハ来るゝも又はため
待こゝろ
山乃はにいろふ小月の又めもまつれ侍ての帳なりけり
やまれぬる河をまちそてまそ秋へしうくれはまてものしのめしる
今ハまつこゝろふくさ袖となのまゝハひさんあれきさ乃うはのか
まくに身しもおもひてや紗まくまちむかひ紗なく八門さきれしも
よのつきさら外まちて吹くれる月を待ともくりいひらん
人待よふ
秋月の秋の夜風乃来ぬみきまつせ我せこ衣うきうの衣
ひとまたまま君をまちきる人乃あたたらつくきのらねもまてと風まつきても

人めこそおほかりけれ難波めくこやとりくるもおもひまつふ
ころも今よりかはらぬおもひはしからはあら夜ならは我くらひぬれかく
よひ人をおもふまくやしきみれはまくこ乗かきにせなをやりつ
なみたよか
なかれこ衣のつまよりましくらふまゝ人のかすきものゝ程はみなかか
なかれもいそのみなりしとやとけ君かゆきてかなゝりかうきは
〽とりくをなけゝしやとうしもなよくふこゝろは我身をまこと
これやこれなさきまれを塩焼のをきおもひおもてはたくそ色は
ほれなるきく人なとゝをはまつるかゝや長のたよりもむかしるらん
ゆかし人をまつ人
なにはれの難波の浦かゝりおしふき衣へてなもちかし

くひるしや人をまちかと　秋やとそれみゆはほしきかなもかりけむれ
ゆかやとなきをきたるへてかりきくらうもひおもふ見き枕かけきれ玉章ま
また章のなのつくしの門さしくる人めかれしもおもふそこらそみめ
ひとそひめなれたよふもあかれ舞つかひなかよみをすとかふかれかすき
人ほく
なりし入ていゝ言の合せかつれなるきをきさうらハりかれ人つくもうれ
思ひらしあかれかそむなれ年月をいはまかふ人しゆえや見えぬ
〽これはうし文を通すかなこの世をまくと一夜と契まつてくよ
なのつらしや嫁まつて見しなれちゝもねひあかぬかしなまなれやしきのけ
見かあまりむかし人と安けし秋をつそきいゝかいひさや
かをそ作

〽ハるみすひえは糺の森の夕河原ゝろふかよ恋つておもふ
契りおかうさそよやぼそれぬそへはまゝゟ我すゝめと身をはたとりて
こゝろもとゞこふたもやをらくうそれ思へなりせんとをの
あかれすとた〇うしめゝきかたまなのゑひのきはまよえらり初ん しを
かゝる人の心つまちぬ家うつりそれはなあしは恋もちか 引
やゝされまで
なあしうへうきにつきてもとまられぬむよ八さ我身をくるき つ うらみ
何様へとなけくあまりにもしんやされれあさ人のとくハ
今も夜んはかく我別れかゝみときゝ降りゆし人かわらく
暁のうきは別しかりそて我ひとりは人に恋しさ
落をらおとゝくむぞくるはなはなけよ人を忘れはてや

ゆふけい

ゆふくれはてきのあみきわたまでめぐるもわか世の人かはり
かゝんすひの森は河原の夕あよかぜもあへまとりかゑんなまあそり
まくれにし夕べはとなく鷹は浮さしゝくる秋の暮 引
〽くまてこそ船は中は水もうつろかめけみしともえんともなみ
うちふかすくかりもあらぬんをいつてよかへるつきさとうらん

松とうけん

〽ひと〇んしやいつまと恋は鬼のえうなき家だにおもふくろき 引
〽さうよなす我らへとはいきれるきは家たへくおへ金をまゝつにかけそ
うきたゆうんの中は行やしさはさてもいかもしとうれのあ 引
うきはうらく文を書東にあまりしぬあちきるとは雅もつゝは

たえぬるか待ちはんさへをいとはれぬ夜半ありや今も人をうらみん

れとひの例

今按ずるにおもひおもてさしいふも人は思ひすることなく

待つをも夜明けまでまつこと思ひなきもまたあはれならぬひおもくん

例 きし暁ぞ出てみれば夜まもうき別れのたちくえり例

夏のよもなひきせよもみし人をうらみて夜のあさきみまきく

みし人をうらみ出しと様に男の心もうらみ我こひられ

むかしをおもふ

例 石上ふるきをおもへども何ゆへにむかしをこひぬ目は涙

いにしへの事ら井にみて世の月その様もけそとも 例

行るまでかくふしなれしそのみの世へは哀れをもしやはなる

さしもいまはと人に思ひしいとしへを思ひおもても老れぬるし記

されば今はいとどしも人を男たらん昔とは又一様なちなり

むかし人の人

きのふを見し花の咲くより風のちりやくもひとし人は忘れね

いましてよの月ぞ悔しく年寄りもありし昔のことをつくま

ものかしはさてやまれまし今月よ世中あはれなる人の思ひ

例 夕暮にむかしかたりし思へるれとおもひさまやなまおもひ出やと

哀れにて浅きとし月ありてそれなん見まほしければかつ思ひける

あはれぶ

例 秋の夜の月の面しき人の記ゆえは忘る心をそれにたぐへよ

例 今もあらぬ世には有りぬともとは夜ぞ人はなくる哉

あやしき世にそなかりけれはつくとつきこゝ世秋の山風
山彦もこたへぬよ煙たつ川あさまの方をはるかにわたりと六
いきほひ人の中をいひわたりしとみえさくともきみよみかりけれ
わこさ海
なき跡の人の契りも中々にはかなさあらき世とたのむ計そ
いさやうらみかねてまちこゝろあはれ渡しおろかなる人まて此世とも志つ 禄八
たのまし世に身をあらそ志てあえかなる武家の月日のむかし契りぬ
かくいひて人とあらぬ契りはなけれとも誰かこのみかはひやるらん
あやしき世に花とや人の心をひかんうつともすき井の 読人
人をたのまぬ
草木の家の名のみの宿も植置く昌なれと見えやへみたる

幾人か思ひのきはそ来る人そそのかたと志つの女夢となりぬめ
なりひらの恋にいつまても横さきはけりいつかもさきのこころわかるを
世
すきわさ縁をもる人のまつすかたそこに書ありやこころ
さうつりまして身を捨てくるぬとも浮かれん人や世にあるらん
めつらし
春ふかきをしれく咲る桜めつらしとおもひわひるとも
見てたまくさきみ夜ならみえてとさらなり
かみくも植ためしれぬ志の高初花よむなし妹か梢
ふしのねはあつしけすき煙あてわらぬ姿ひそめよはむなる
夜山乃まか家の桜みしたもさかいひし同しくかせこ
たのむる

偽とたれかひそめてそ申くまたのむかこともなさけなりける
このむめか今ちるさへのうさ〇ともおもはすふかれからるれて
たもとんとあのむかし中悲しれつてハつらきの、にゑめゆかん
偽も世にふるともみえしんきのつらきも偽乃あはきもふかきは
東もうさぬ今ハよもそとてひさつたのめし人はそまさろくやかに

ちやのこ

いかりてんのまちをおくハきんかけてちきりしみさこめりの神
よしや我人ハ今はまちふともたのそこくハたのくへてとあ
さらハ又神のみしるしを引きてまもるにに行のちきりし
うらみ中よりはやきさ神のちかれくうけもやらうりの談みかん
ゆめうつをちらひし神の偽よおもひすててや人をとハまし

くちなくこむ

我恋ハ今こその森ちとふくちるめハしめをそろりも人ま恋世に
世よとらハたら名もあらしやまもれ〇よ恋なすよ夜をとを恨よ
白むをも恨ても人よさいふみよりうちたてひとをおやめあるよ
夏のくの折ハなの花の恋なるもたてし浮世なかれは
えハまちれてよふのこゑのみか枕夏ふかすてても人よかかるかな

人つま

年をへて人をまむやと恋まよこそ心のふかさもかくあきらめ
れなあふ人みよつまのおもひしハたのみなかうも恋すれしく
あハれまもつくろんのようしそなたにかり恋りしそれみなう
ぬしなくてさせる布もよ抱を人のそてつまりすすくふれそも

我とのとかれはひとりさらへ人妻ハとしと人ハやかしく妻ハこふるも

家とうりしるをかれよ

紅のうつしはさらに深かりしおもかけのいろ色婦のさは

我宿の婦か来れはのすゝむるてみあつらしきをなく花見まくれ

花やもとめんりとハるやくるれはくるゝあつけこれそ今人ならむ

衣くれるつきさしてもかさりしともにおもしと鏡か求寮ハ

もれまかれぬ家よおる妹かなく来れはさきのまよ人を待やうらん

木のはひやも

いえ山乃志くの下宮まやをぬとておりはまたへぬ程をさしめや

梓弓ひきおき乃つらさ我身まそへくつけハらうをかりや姫はなる

わかしみもおもはす身ハ下おひのゆさおふ程そまつらひなう

恋ゆへハ我くろかみもみたれそへん心からこそしれぬ身そよかりける

身を捨て後之人をこひまれハさこそうハかことゝハしはなん

木とひとつふ

咲ものふ風さそふまゝしぬるあさちか花をかもてまも露こそわれも

いかゝせんいはぬを雨しおもハしとおもハいろく人乃恋しき

まつもこゝてまくらぬおもひもまたこそれなかりし人のかをいくさきめん

いかにせとももひさこめぬ名を世中すて我心まも伸さそふまつせん

後の世のなけきと人の恋しさとくらへてみれハ身やとひぬ

これとおもふを

いつまてかおもひわふらんうつゝならつれなきはあとにもこれおもふへき

かよひくるに深きハ人をよみしかなかよしあらや何とおもはれなからん

わきてこゝろ成ゆへ様の身のうへにつゝにあくかれのゝめ
難波江にあしをかりとはゝねえやたかし小舟こぐ人
新造ハふみにわき夜さへれともあかねハいとゝしけれ
人をこそうらむ
おもふともいはれさりけれ様へくれなゐのうきもみかくれて
明ぬともまちかね中の道ハせきとも人やとめきつらむ
久かたのわかみつてまつめくれかゝハ袖も人をあはや
勝への名の心やおハもらしかれをつきぬ道はやま
明もときて人も初夜ともちかくハいまこすきし身のうらみ
とゝめられ
こゝろへぬ心のよさハ様をうつゝさきためしなれ

勝へハなけきの数ともしらぬまゝゆかしと心のよさ成るのまゝへてこゝろ
心をしらぬもいふへきか思さりけく道のたよりにかへる身の上
大井川おもひこえし流れのなみたあはれと川をあるゝ花せさしには
嵐たつみ山ちるもみちかせさとめりこそいのちの家
君をなれしむ
わかきらぬうき君へ心の身をさたまいかん心のあさくなる色もん
君に便りやうきみのせめてあはまことの心よりかけよせ身にしむやうに
いとゝうらうき君なりきれ深川の音なきハ身ハ清さらし
心ちかをおもふもなし君か河をしかあはれさ深み世は
今これも我いもこそ志のふこそ世をもつ名をおしむ哉
おしまれ

〽命かたおしまぬまて忘れぬよしや我名ハ世よときかうとへ
なきりにのきてもつりへ生埋まれあれ／＼てふとさつせよ
そゝやさきを嗚り称やまの郭公なめりさつくるの八千わろ
聟りわ八盆なしてよ大ぬきれつゐよりせ咲き子なとる
急ぎたねのひろめて迎きて男にそれの上河手の何かうらん

なすされ

いかせんすなる花なれ涙川つ迷かくきりんきりみもなし
それハよれしなつむ我身をきみきうりきこゝぬる八無名にしか

〽さりみよ我こやまあまよ篭君の花のわさなハさえをさまし
たきこえぞ時雨まもり都しき恋の替にみぬぬすきれ蛙を誹まさるらん
いひかる人の篭おぼふし托竹の方もあまりわかれ

かきもこ

〽さみだれ川山のさゝれ枕も添人も伊まかきもこに添あ夢見
御かきハ第る御めくろこまかきもこの添なむきよの文もちてそれ
かよをのくたのまさわなりかきもこう一ゝろしぬそて枕さこに
川ふれ乃きさ八つ人迷とかきま子にいそてかすふとさつせをやさん
たかさくまかよ迷たかなりかきまきをまをとさりなりたと忘しうらん

かせこ

思ひあかハたのめしとてもかせこハしと看ぬ月まきまさゝらめや
とおんといひりかせこその村とく月日かそて添かくるしき
〽さきゝえ松原の秋風宮さ聴よなすと我せとうこまきさうらん
うら浦さに今かを舟かしかせこうくるや夕なさくれのいと

わかせこかあんといひしにこかれしをこれ夕ぐれや山路にしのぶらん

くれつま

しめ子かわかせこ衣のくれはつまかさねらさうとこかしみ儘へ
こさくるみし便くれ乃ともわか身得ようしらぬ人にしられはてのこ
ようやきしつくりかきあひか影えまてこす二代つまハみてハらぬあめ
冬の池のまを代下たさのとやハ水をふかめてかよひそれうん
まろ人のその月もそれハうつらもえ忍ゆしきハうくれなまし

二なきはすか

たくひすくとふんのためしとて手にそのくる雲乃一あ
むかしより恋すらひもさてをけとまうかたくひハ世はあり
一まちかぬ恋やはふらむひてくとうつもとみなハかおとよはませて

衣はわかきそれ色恋こそ身をとふまハかくん今やも便こふうは
宛にたれるとふふれはよけつきも月ハふうかもうすきこえひ六

今ハうひちし

色恋身のひよふさ代はれるを今ハひうた恋にうきれて
とハよれくやしと夜もうきうれいふようひうきこ君のをあね
あひみくの後ハなすの世人さきたるぬるひのいふひうるおれも
恋ひ路の後をハもてあはすて代今をおもくれはとひうあるふ
うわとひふもおもうし今ハわか人のつきを見えさせはて

こん世

こん世ともまふめくてあらば恋あしハかなししつくさとれやらきん
いふさらハこん世を後の此かすてうきをまうしとらへひとくあ

いましめのむくひハ今もつれなくハ情の世とそれもさこそあはれうらん
めくりめくりてこん世のやみのみちをハ露のうちにやむくひをうまし
いひきかん盃をとといひと身をそひくまま世のたさくら川かこそ すき
かる見ん
なりひら○をまのあたり人の形見とそいとうらみをさんやうしの みん
おとむ俊成もそ本の形見とハ身のうへ我身の人のまれや きん
よひくハ我むしろうんの床の上もんやとくハえんを思ひき○
きうんやハ行のあるかなる杖の東の月よんのこまうちさうハ
俊くハ是もをる河をおるくさきんすらうんの形見とあかん
むくけを
むくけの露ぬと雑川の身をハむすくるさんとや こし

むくけを雨つるさかうきの世とハ二度よのさかうみえうらふ
俊つハ雨にたよりおちくむくけを雨ぬさとへいひもうまそやと
むくけをかそうめの東もわか袖におくちとさよりん涙ハいとひ
あさかハ東のくれむくけの雨へ花のあたくまくも打
むくけ
たくらさく涙の露れむくけつくきさころハかけてされ まき
末なすく身のこしらともむくけハいかさをらさらすれ きん
こしふるよも後さえしむくけもむさふくみめ残すうき夢ハ
あしてふちさりともされむくけのかくうたのみハおもひ道 てき
むくけのいわはいらんとハ身たのまハあれくもたん夢恋 ふ
かん

いまさんとも此かみの杜の親子のいつくにかはりますりて
ますゝみはまつれかゝおちちみれさくに地かりさゝこもり きかへ
ねりかくるひらいれかみれこゑんにれはらくとたのむかしら此言 ふ
人とていかくハ分くん鈴様かみ重ミ子ほまくらにたハつもをり
うさすちとおひきうりおしくろうさ此みてかれハ今もむかしから
ととゆひ
親子は名を老かうむつさへのかりとゆひハ人とのちは して
まちうあゝ我とよひの親ふれハおハにこしも君まうが
ゆかちるくおちてとくゆかとゆひハうちそまうれぬ人は形見 よ
もとゆひの様うたまれの一むすひうしろめくゝやゝこきんと まうし
世をいとひ今ハとたゝもとゆひ此その二さハ志れかゝ人ハ今のひゝ

く
此暮にさしくしもなく如ようのたまもの世に此ころくとせまた
君まをさうてみをんとおひまいくても鈴乃なく人に縁あさうろん
けふみおまりも人をんまはしくてみそうしハかいひらきおき らり
あふこともきうちやゆかきをかうちぬさにつきのをくつのこゝろかはせ うえん
世の中は今ハ我身のまゝくしをいさつりまのくためしにハ了
たま
これもけまてまとうむのみさねるや世をてらしてハおろ人はる
いましへのさいきしむハかうつきれ志ろれ志ひみちらぬ我るり
須こさは袖ハめうとも猿ほおくむやきかうんかうせこゝめ
各やめれちさふ此むすハいかをを花とみるや雨さうん

たつ山乃ふもとにある事とかれたてゝみゆるを玉にまた人代るあ
玉代匣
〽二 なからへぬ人の心もさゝかの世に渡乃玉の緒ハきたえさてあり
〽 わかする浦に満ちて玉のあまたかくはしなぬ世にもあ はうん
〽 身につもりそゝくの年をいふべくもひとりもかくれぬ玉藻
ちよりあるとしいひしとのつきものをさけくいつゝあひなん
あかくもへ人のゆくすゑの玉ハあをき世をとふくらん世をさん
玉たすき
まれなのこおひかけ玉さしそへくしきそくすりかはる
〽 夢ゆのめかおさてかもて玉こすきやひさくれちるふ世にも
鏡乃めかせりうれたむと玉たすきひきそうたりハつゝ我身のかと

稿ふきなまり鏡のあさえ玉のすゞ姫よむかくかきそく
玉たすきさ十つゝすゑけてひろきうへ世ハすれ
かゞみ
〽 くらひもみそれうきまそうみうにうけたるり物の夜
〽 花のかをあかるゝ鏡河よあそうてんゆすくそう
いふかのみつきかゝ我すえんあさえ御簾のれとますあかすれくみ
〽三 あそて果は熟うつりしき古鏡さまれかそへ濃水ゆくふかく
〽 くりゆきさ川のきうえ氏ゆりくまみすかひあかね代とる我
まくら
たそかしやつきの枕のあまつくりかとおもふ人ハうちもて我まし
〽 まちふれて枕をたゝみやきこ世にひとり頭ハめか夢路にも

ところねよやとくれんのおもいは梅花さへこめて夏をさそへこの
うちをけり花さくりしやう人よわかしてかけり夏はみし逢
あさくさの花をそみめもあそめれや人の夏よたぬ
まゆかり
あさまくまちもちつくもなのすみ新しの花のかれてかさ
半歯さうにかそともゆかくらめ八しほなかけてむすふの花
袖かそとも雲井のまの花いつゝにあかぬ波乃ぬれぬさらん
そのつくり世をふるもの花乃あかぬ夜ふひらやくさらむ
の花乃ひるくも世よあくらんひよそさき人まみえまし
たゝ
あさくらにまゝでふ命のあさをおくりまつ風もあらやちせん

山みちやみのゝひろさぬをしくら時さりひくまし花なかむすぶの
こゝぬれつ秋のみさし浅深さまかさそよあそむさあらし
山ひけのなき代おそみかそくられともへまとを時えや
やまろかあさそはなけてすかくれおさくしきはかのおうら
さいろも
いふさんかさし夜のうつゝみくもゆまよを夢とさつぬるは
つゝふとそこさうしや夜かさうゆまに年はゆめかん今よなけやと
うさくなのあまり波をさゝ乃やてまかん深き夜袖そとろゝ
峯たみ文のとゝ山白あめかめの夜にをさしにかとこん
うき世をあくとも別いとふりとあまのえ夜まかれみよさらん
あし日やまさ夜

いつかはとしらぬやくおもひのなか衣うすれくとくも妹にあはなん
きみかためおもひの色やき衣かくしてうらみこともぬれと給ふかな
あまのもしほやきけるは風のまの浪の上に塩焼衣かけてけりつゝ
いつもの塩焼衣ぬれてのち衣なれ給ふあまのなりふ
伊勢のあまのさ衣いかなれはぬれくも人のまとゐなるらん

夏衣

ゆふせこそをぬふもむらさきつゝ夏衣人の心はうすくなるらむ
そのかみの我たちかさね夏衣せよひうすくのこし物なり
かはせこのさしてつくりぬるをきこえみ夏の衣にをかしめなり
まくしさは何しもお前しせみのはにおもふくたちをき衣
世をすてゝもえ我のためにひとへなりみくひ暮らしかさねはさらにすな

秋衣

七夕の秋さりにかへる衣さへもいかに濡ると衣かへすらん
秋くれは露も何にもさよそめく我衣手やさむくやなるらん
衣手の涼しさやいつしかさやりて秋の夜ことに露の置くらん
あさけの衣手をねとはさまてうつ秋は紅葉の色に深く
秋風はそゝくにるしいさよひもかり衣手のつゆもこほれん

衣川

秋かせむかんの人のあさ衣うちたえむやつきの世乃なかとなる
衣川ちきりさえもう月の影に衣かつらに来てさやかの空に
みちのくにさてしれ衣の秋あはせかやくもいそくけらぬをなる
秋されは身のまさにふたつの里まて知ると思ひしくらつ衣かな

山ハ色やうやうそめ残すらん葉かへぬ松のさ衣とゞまらぬかハも

かりの衣

糸くれ柳櫻のかりの衣たち渡しけれハしばしとまらふ
住まれぬ仮の宿の浮世はかりの衣世をたのむハ人やさうらん
かの衣まくらや山乃志ハしもかハにつるゝに露のつゆをみるそ
草乃露ふに袖はらくみなのかり衣にかりそめの宿のしるしかなん
何をもおもへたゞかり衣いとさしも志らのもとの本柏乃かせ

よるの衣

すり衣をきぬ日かず経し袖よみ乃れたる人をまつ川かせよ
乃のふてねたる一しきりの衣あさ花桃の入るにうつれん
山のみよみし山かげは衣よもの床ハ小わけれやへ

梅のえ花一しほもみる衣よもの香にゝほふめるよしの
何をこふとてか衣ハ身をちぎりて人の秋をちぎりぬ

あさ衣

山かけの志ろきあさ衣みしかつきまとふ田井にひとめ月ハ
やまかけ乃さしてあさ衣すり衣花の袖しき露もや
何とかするらしをみたちのおさゝの衣ひとうすきは衣を
たゞかはあさつまとをき麻衣かきまとのはさそもろこし
我身には文のへもすさむあさ衣ありあけも人のみる

うは衣

守川のそてにうけてかはしてゆふ月のかれをも涙ぞ
山かくれにかのうつかハ衣よもの世さまもさそあれに

秋のきそ風をたきらしくうつゆきハ身よりけりそむかしは衣かな
やまかしのまくらをまくらハ衣んこそくも身にそむるなる
谷ゆくかみの衣よ身をとりしらさ世済の香乃山人
ぬれさぬ
いふきん身よつきまかのぬれか衣のかもてきしまちぬ袖ぞ
雨となすきれよ立すらぬれ衣のきそハ袖ちりくハさうれ
露河原行よつきて濡ぬれか衣とそのあへとりかしもなして まし
世中よりさぬれか衣ふくいかりハのくもふしめもせられや ハきん
身をきを夜のかりのぬれ衣かつくまもすく歌家つる
流うれ衣
衣ふきさのり乃衣のきみ深ハき世乃紅のくみのうき浮

〽三
おき浦しや旅かのりとのとかぬ衣かみあくれハ人もかやきとれ
さらあなく河のか宮乃来す女の山ふか衣ぬれくかさそん
きるりのおまのまさひのまそて衣ひぬたよおりを程店さん
今ハまれぬすき雅色のまそ衣をうさそのみや世をきこ宮
ふきと浦

〽三
神無月ふりのこやこよまつてふかきと浦もあをうきまつ示
こやかしもきくまさかあめ晴ずしのかきと浦さに桂園色を衆之
園のさよ歩宮の宮をかねさてあやのかきと浦の色をまきらん
袖しおきハ宇そも袖ん何うその折を時りのかきと浦らかなや
きんく何まうてぬきと浦のひとつかよをよすうそやれぬよんみ悲ん
宇ん

わさも子か見ても外ひきこらしも夜をうきて入る舟の西 あさりに
花さかきて思ひ出すり我おもしと味つくき海も人まつかね
たなやめ風りもそむしてふりと父のり思死を宿旅ち行やえ
あるくあもなりに旅ちをわさも子かりハとの手すそ外ためりれたり
わさも子かわもたま道ひもおきそいろ先あとやたゝよ我恋おもん

ひと

あひくえやまき外のりの花のひもむすふ旅りかむ白川を
旅ちも夜くむすふあかひもおりそすくもなとぬれれん
さよ夜ひものとち絶えいとたてさし入人そ我やとハたれき
まきてもこにま枕ハあハ道ひとはせなりひろきうくかねさん
むすひてし我下ひも外らをりハあやしや衣りくへきよひ

たひ

むすひちきく旅りたりふれ下おひの文わりよにのくりあふ まそ
今さらにむすふ旅りもたのまれなと人よとをて行かそれ下常
いのまてとも神ハりをもちやひきちおひのむすひもれてもとむ 霜月
おりしもあれれえやハむをうけ常ハいもかハむすひ外色ふそかりし
思ひきや我身きへめの衣の音のうちそよ人をまちそえんとハ

ひとり

徒まこハれて添ふ夜たきれひとり寝よ我こはれまたいぬ道
あきこすのくあたりすれ下むすひハ我ひとりとや身をこなさん
たきとのくひとりねおきのいさよりそひまされても世をゐとはん
おふとふところ神まきたき枕外ひとりゆかりけさや かすみ

まろ人のとかやひとりみをたのしびそれハのがれし女のおもひをもしらなれ

おとれえ

世よふれハあるかなきかのことの葉も情あるこそわすれかね
くらけてさへハとまりわたるやなかりけるわさすらふとのハ
みちふかきの井のつゝきてさえもちくさね人のとの葉
秋風よちかきとの葉はまなおかしハんのいろもえんやハたはまん
いほちかき人のことの葉んじさしうつしさらへやくちとも有

ふえん

ふみをさし昔の紀乃文をはじめこの世の人やまなびん
うらてなしとやまとふかわきものをかく文の詞を海さへ女と男はん
むかしの八十かちの身ハみくよゆきかれぬ詞そみえなり

たそハよしのをりそをみかれむしみをとく人ちりとみのさゝなゝ
春なれハ川は調とすみちの色を春さしていくよも衣のみちみん

おもと

友これハあつま人おとのわしつをたよりけてもる友あみ形
世をたちくるふみよさきしと涙のこものをこと人わと八月よせ
俤人のたちれのおもとれた名に出てくるき世を秋のちくへをうら
秋よりひめつこおもちのをわるたにせめまのこゝをとめも月か
秋乃夜の月に見てあわこととの音ハなつ見てあわ月もしものあり

花

色の外の道のちまてに咲花もんたるハ花のあともの八の夜
世の中ハうさ一ふに吹花のあるものしやちそこそ絶え

ぬきたつやこゑもみ笛の音をたにまきてみへてちりちらん
みよしのゝ桜より笛の音あらはあるを海とのくさまさへいて数
うしろはやまにのうちひらけし笛ハ子のこゑさそ身をはなれ人とかう
ころく
ゆみ
いかさまにあるのかゆゝ年をまへてあひぬるかひとめ合つよき音を
引ていしえんやはらしえんあまつさらと色しかなし心よハさは
〽涙をなかれぬあつきみちみそゆみかなくさそて後よこひく人みなたち
後よ海こてもみれぬそり海ち人ハなまとうちまりけりとをせそ
いまのよややちの心もあかきれくハるう矢見せしみちくさるん
や
ものゝふのおもひの風のたしかれもうきよまくやあそ数れる

松ひかれハのやまさとてふ淀のふるきうくまくれそやみ
人心たのまれぬ花さかりやいなとなまつにまつ夢りせぬ
今ハ見れゆうちれいそみかまそもとれいとつきとしら雁
霞よさくてみ風はるのまりをハ身よたる矢をハいそぬほし
たち
〽うら霞のふる入れたちくむしよわき風はまりにさくらめどき
はつきたらとろえ我ときのうへより梅をとめて咲世よし花
うちやかるゝあらかやきハ風さくいはひはうりそし世あるや
世中をふうふんもいそ太刀みさやハ花と見ゆ流はうりそろつき
山かくし松のおふてふ岩が根よおきめし太刀ハいつもうなれ
かゝるか

何事をおもひのともしられぬこそゐちらまも力やかなしき
拾やらで身をはらひ果ぬ娘の刀さへすぐに世をはなれはてぬとも
今ハ何事もなかるをかにつけても刀世につきぬ身とそおもふ
やまとうたハおもひつきひ刀さも世よろめてさもすきふや
からとさへあらぬもあらぬ小刀の世よろめてこそ思ひ侍りし

さや

いまはしもさそしりぬらんしりさやなしもむよしふかきに
時よあれハおのとおかりさやなまとなさきハいかみとも侍
たりまつりなふをされともみさやなきたおりなけて待つや子ゑ
今ハまことをはやくもおあふひつらんありなるまつくりか
みなもうしみせをたのむとはふ人の身のはてをおもひをさや

えりか

たまもこれひよりきて御入りし葉のハかなくおもさかなき
世よしらぬ我身なきの数くはかなのこかりかをあはれ
露乃と小秋おきのめとなく身あの代をうけそ侍ら
あり乃山よりけられハかゝる小ほも花つたさの卿
かまみえぬむのこれおもしろかりけむものちの世をかけくる

あふさき

月よあれハ初よさひかふかれのあはさき乃色もまくしちゆ
かぜ乃月よたゝへ扇ハおもはる風をも文をかれ
てよをあふさき風ハうちとそもゆうるてつ日数
南都をほしくせつさり扇さそひかれて我をかなしきろ

ユト
ひさかたの雨もさつきもたなはやあふ扇乃音もえんやはちく
かさ
ふりやまぬ雨よ枝のつゆも笠おもふんの川のひろかん
夜るさうとやまの尾の辛く別れはつらしさりきせみなれ候ろ
ユ
おもきみの夕んなかえのをひらかれはあめかしさふハた重の乳 まあ
さるとてもさせうたとなれはかれきのをおりて不定なり つく
すにきんまかせさきもうき地里の下にふかく濡衣とふくりか
みの
くれはみ桜らきなきくもそもまたかまし心よ思をつくす身気と
三
ひちん乃形もふにあへるふかさのもとにかまて世そくくらしめ
村雨よ形を色みさてめをまふ所へ今そみのをきるん心ちにる

主滴ほしき世のうき何のくれなゐすかりハ山桜ちかくもかぬる
世を捨て人すものを思ふかれぬハ秋ひろく今ハくれなゐの衣
くこゑん
いそれつむちあまをとめかく花くみちりし浜にもやふらん もイ
多くまつみさして桃ち花くみちる花時の夕によふ花にれ
三
浦ふかうしるふかのうちもうひ果てなみむちし花色の形ハ
めかわかまう漆とやうんうまの花の武蔵をきるみてはめくるに
をのつうかきみよりしぬれハあれと今のさまう世やなん
ほと
ユトミ
いかりして形のつとへてみすていまかなみきんまうつうし濡
たひのれそのあれきうるう海山をなのつとふうつても

志けりとて山井の志れむとひつくれハとひおつとまさりけり
紀まてこそ隠らんたくるきさこえ川のうし流まつとハ
いと奥ハみかくすふのり紙つとかしてつゐのたよハそしハ

いろ

とかく色ことよ心を深きりけるも世に絶えくるものの人路なり
ふかくさもうきまきめしむ時とに色なり桃ハ深きなり
春といひ秋とこしも思ひのうかもいろいもあらしき枕ところこれ
うつろへる人の心の花よこうりものちるくさも深あまるらん
世よハ言のはにまつしたるハうまれも見る桃りもまことれとらん

くれなゐ

いくたひ深て色に紅くれなゐの色にうし紙も今ハおもえて
紅の色にさくら紙の名よりうつろふかもつみそめし色や
くれなゐハわれ秋の名なれハ紬の深さそきそ紙うつろふ
あされしくも思ひつゝてやさ紅ハちしほの色まつてみえん涼
春ハ浅くし秋ハすみちと紅の色の桃も川の時なりあされ

むらさき

みちのくの縁もむらさきの衣まて流れくしもむかし路なりか
むらさきハうへくくれなゐの色なれとさもうるはしき色らハ色深なり
紫の色に涼のやたもいまして香もしれかくらさりせは
むらさきの縁そえんともまた言は志てつふ色の深き色
忘れぬや紫ゆかりの縁人のまさへ志りしられくもありしられさ
くさかし

あとなたるふいりはつらんにほりやまぶきくちなしにさけり山吹
いろそへは道とゆいらし色ありみかどよ名に人のさかりなん
こゑもなし山吹の花さかりて色ありく花とりかへてもとゝふやかさん
いかなれば物いふ事もなきこちなしのはなもいはぬ色にさくらん
色なくはいはましものを人ことにとくまれなく我世なとも

見どり

年をへて色もかはらぬ高砂の松のみどりは誰か染めけん
山陰やふる木のみかはかはらぬ色の文たゆるもあはれ
雑なきはかはらぬ色のみどりの小深くしめ給ん
天地は松のみどりに千代の色そめて久しき位の松
かくのちのはなさくころみどりに世をたのしむ世に

みし紀一

世中は思ひかなしき人の心かはりぬるは秋に妹をあはしらん
くらにくしきゐまゐて山と見ゆ秋の花の紫にやはしめらん
露にまかへてかはらぬもみぢの世々のわすれし紀をむすふ
錦おりなす木の枝の紫にかはる妹か門ゆく
菊は身にそむ色のしるへかな千代人のためにあひくらん

あや

またもえみしはるかなる人のあやおりなす山のまへ
嵐まかせにふく風にふかれて雲のあやはやうきて世をわたる
秋のゆふつもみぢに錦をおりなす雲の袖にぞ染まる
かくしてひきはいとよりかけてあやにもつつ世にふる

ところさや大門に入りしところにとりへのつまにおやたてまつる

いと

我立ハ機乃しきいとくりかねていろかはしにしひたやらん

一すじにむも今ハしきいとかうさかうちに世の中よりも

ひきかくてまくてかいとの乱めくるも命なかくも年乃へおん

さのうやハさもとかにかみ夜しきいとかかしくおもくしひみむん

流の日かさ川のいとかいつなよりまーしおかりの多かなるらん

まくら

しらさし海風ましかハおるぬかく人乃かへてかさのたまハ絶

まつかよぬしかくまこにかのるかハ高根乃雲かならに似かり そてなか絶

秋のよ木綿の衣か一重にてひとへよるに紙そ風ハ身かむ

人しれぬいもか夜のつまなくハましもしひの数そかさねつ

それもまたうち出ふそかすみにかれハ川ハおしかね花とさうとし

ぬの

三 さらし川よりすそ今さらにてつくるハ波のうきたつ気色とそみる

うらにおふとやをかけるる布さらうを霞暁もそかうみのとし

いつかきんけるひく布のこにはハ身をかくまさへ今さ秋とやハさる

をさちぬそぬるゑのかそ布むしろもりうひなお帝にいつくおひえん

今ハよにあるもまれなるおくぬのくとちひられむくはむつし

如家り

国立公文書館
National Archives of Japan